

◆トップインタビュ
地域を支える
優良企業経営者の
戦略とビジョン

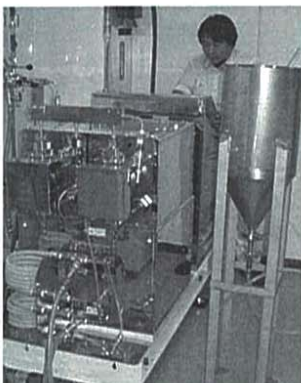
御社は原料を微粉砕する機械メーカーですが、機械にはどんな特徴がありますか？

ひと口に粉砕機といっても、目的に応じて粗粉砕、中粉砕、微粉砕、超微粉砕など、さまざまな領域があります。このうち当社が得意とするのは超微粉砕、いわゆるナノテクノロジー（ $1\sim 100\text{nm}$ ）領域の物質を作り出す機械です。なかでも、石臼の原理を使って超微粉砕するのが当社の機械の特徴で、「世界最古の原理を使った最新の機械」と位置づけています。この方法は業界用語で摩砕と呼ばれています。

どんな分野で使われているのですか？

医薬品、化粧品、食品分野などが中心です。医薬品に使われるのは、物質が細かくなると、それだけ消化・吸収が速くなるためです。また、化粧品も従来のように肌の外側から塗るものだけでなく、

があります。さらに細かくしようとするのと、石臼同士を押しつけて運転することになります。普通の石臼には気孔が存在するため、すぐに割れてしまうのです。そこで、一〇年の歳月をかけて、気孔のまったくない石臼を開発しました。世界一、二カ国で特許を取得したこの石臼は、割れないという特性により、砥石同士を押しつけて粉砕することができます。超微粒化が可能になったのです。また、石炭を砕くばかりでなく、食品加工にも使えるようになりました。それまでの石臼だと気孔の中で雑菌が繁殖しますが、気孔のない石臼ならば、表面を洗うだけで菌の汚染がまったくないからです。現在、力を注いでいる分野は？



▲1台で乳化・分散・粉砕が行える超微粒化装置「マスコマイザーX」



石臼式原理でナノテク世界に
挑戦する粉砕機械メーカー

医薬、化粧品、
食品加工のほか、
バイオマスエネルギー
分野でも脚光

増幸産業株式会社
(埼玉県川口市)
摩砕機・粉砕機などの製造・販売

代表取締役社長

増田幸也 ますだ・さちや

当社が得意なのは摩砕による超微粉砕ですが、すべてのお客様が細かなものを望んでいるかというと、そうではありません。また、カッピングや衝撃式粉砕など、摩砕以外の粉砕方法にもよいものがたくさんあります。そこで、これらのハイブリッド技術の開発に力を注いでいます。たとえば、五年前にはマイクロマイスターという超精密カッピングと摩砕機能を持つ機械を開発しました。ジュースやスープなどを作るのに向いており、当社の世界戦略機として位置づけています。ほかにも、一台で乳化・分散・粉砕が行える超微粒化装置などがあります。

経営の舵取りで先代と違う点は？

私が入社して間もない頃、営業に行くとお客様から「おたくは、機械はよいがメンテが駄目だ」とよく言われました。そこで、なんとしても品質やサービスを向上させたいと思い、社長に就任するとすぐに5S（整理・整頓・清掃・清潔・躰）に取り組みました。また、2000年にはISO9001、その翌年に

細胞の中に浸透させて、体の内部から肌を変えるタイプのものが可能になります。この事業を始めるきっかけは？

私の祖先是江戸時代から鋳物屋を営んでいました。戦後、父が復員して鋳物屋を再興しましたが、自社製品を持ちたいと考え、豆腐屋向けの自動製造機を開発しました。豆腐は豆を石臼でひくことから始まります。そのため石臼も作るようになりまして。ところがある時、町でこの機械を見た大学教授が突然当社を訪れ「石臼のようなものを微粉砕することはできないか」と相談を持ちかけてきたのです。発明好きの父は、二つ返事でこれを承諾。1965年にスーパーマスコロイダーという超微粉砕可能な摩砕機を開発しました。これが当社の原点です。従来の石臼とはどこが違うのですか？

石臼を使って物を細かく粉砕するためには、上下の石臼の間隔を縮める必要

プロフィール

1956年、埼玉県川口市に生まれる。明星大学理工学部機械工学科を卒業後、増幸産業入社。86年常務取締役、90年専務取締役を経て、95年9月、新工場竣工と同時に代表取締役役に就任する。「器だけでなく、心身ともに新しくならねば」と社長就任直後から取り組んだのが、本文にもある5S。その後も業界に先駆けてISO認証を取得するなど、近代的経営に努めている。

企業概要

●創業/設立 1922年創業/1971年会社設立
●資本金 1000万円
●従業員数 25人
●年商 7億2000万円
●所在地 埼玉県川口市本町1-12-24
●TEL 048-222-4343
●URL http://www.masuko.com.

はISO14001の認証登録をしました。ISO9001のほうは2006年に更新しています。先代が開発中心の経営であるとするれば、私のやり方は品質管理中心の経営といえるでしょうね。今後の課題は？

現在、当社の機械をバイオマスエネルギーの製造に利用しようという案件が持ち上がっています。そこで問題となるのが機械のサイズです。こうした大型化ニーズへの対応が今後の課題です。